

論文の和文要旨

論文題目	〈平和都市〉広島をめぐる空間論的研究
氏名	仙波希望

本論文は戦後広島における〈平和都市〉理念の生成、この理念による都市形成プロセスを理論と事例の両面から検討することにより、普遍的なアーバンニゼーションを駆動する潜勢力の解明を目的とした。本論文は第一部「理論的視座の定位」（第1章～第3章）と第二部「事例の検討」（第4章～第6章）に、上記の問いを提示した序論と結論で構成される。

第1章では本研究に先行する理論的背景として、「ジェントリフィケーション研究にみる都市表象と景観変容」「都市の文化的視点への批判と再批判」という側面から議論した。そこではAnanya Royによる「カルカッタのような場所から都市理論をつくりあげることができるのだろうか」「都市理論はカルカッタのことを説明できるのだろうか」という問いを、広島という対象にひきつけたうえで本論の理論的射程を提示した。

第2章ではこうした背景を歴史的に拡大し、具体的な論点に即した議論を行った。Rob Shieldsによる「場所の神話」、カルチュラル・トポロジー、Sharon Zukinの都市の想像力、Richardson and Jensenによる空間の文化社会学といった鍵概念をとりあげ、その整理を試みた。そのうえで本研究に繋がる3つの側面——「メディアイベント」「都市における記憶」「スケール」——を提示し、各々に関する定義と理論的含意を明らかにした。

このような背景のもと理論的視角として提示したのは、「都市の想像的布置論」である。その導入意義は、「二分法」的読解の超克にある。つまり、アクターを権力—非権力に固定化する、もしくは都市表象・都市理念と都市景観を二つの所与の対象としてみなすことによる分析的限界を乗り越えるため、その具体的な対象としてMichel de Certeauの空間論を批判的に検討した。導出したのは、Certeauの議論に見る、時間を空間表象に従属させることにより、潜在的な開放性を排除した「二分法」的読解を招く、という課題である。本論はこの課題から、解決方策として「都市の想像的布置論」の提示を図った。

第1章では予備作業として、Henri Lefebvreの空間論——「空間的实践」、「空間の表象」、「表象の空間」——を概念ごとに整理し、第2章ではa “Third” Wave of Lefebvrianの議論を援用することで、永続的なプロセスとして三項が織りなす三元弁証法、複数の社会空間の始点であり消失点としての中枢性概念、および過去の歴史に可能的なものを探求する視座としての転譯法などの方法論的論点を明示した。「都市の想像的布置論」の導入意義は、上述の空間の「二分法」的読解という陥穽からの脱却のみならず、時代を遡るかたちでの空間産出プロセス検討のための視座、都市理念・都市表象と都市それ自体をめぐる開放的なダイナミズムを認識するための視点の獲得にある。

第3章ではこの「都市の想像的布置論」アプローチを広島研究に導入する際の方途を見定めるべく、「広島を空間としていかに認識することが可能か」という問いのもと、空間表象が生み出されていくプロセスを分析するために採用された理論的枠組みの検討、広島都市復興研究の展開、〈平和都市〉を

めぐる二分法の含意と課題、解決方策について議論した。この議論から抽出したのは、都市空間形成における、被爆者—非被爆者、パワーエリート—市民という二項対立的視点の放棄、ならびに「軍事都市(軍都)」広島が〈平和都市〉ヒロシマに転換したとする視点の棄却という視点である。

第4章では、1945年の楠瀬常緒広島県知事による復興構想に端を発した〈平和都市〉の理念が、「聖地」広島へと結実する過程を分析した。「瀬戸内海の大観光センターポイント」として提起された〈平和都市〉像が、広島平和復興祭・広島平和祭をつうじて反復拡大されたこと、そして復興PR誌『大広島』の分析から〈平和都市〉の当初からの不明瞭さ・定義の不在を見出した。そのうえで、1948年から1949年にかけての復興国営請願運動・広島平和記念都市建設法制定運動において提示される世界からの「眼」の過剰な意識づけ、模範的近代都市化、そして経済的發展という〈平和都市〉化に向けた論理的枠組みを導き出した。これは第一に「住民投票キャンペーン」という動員形式をもって人々に提示され、第二にそのキャンペーンは先行する「日の丸愛国運動」と同様の論理構造を持って実施される。ここから〈平和都市〉表象における焦土をTabura Rasaとして見立てる視座、その含意は着脱可能なものとして、復興の強靱なる根拠の形成という目的にのみ寄与しようとした性質を明るみに出した。

このTabura Rasa、未完かつ理想の〈平和都市〉理念は、復興の機運や戦前からの願望である「大広島」構想のもと、都市の根拠として語られ直す。1958年の広島復興大博覧会の分析から見えるのは、〈平和都市〉の変転であり、達成されたものとしての〈平和都市〉像である。複数の地図、都市景観の変貌、広島城の再建をとおして、この街が〈平和都市〉であることが自明視される。他方、1963年8月の原水禁分裂騒動などを背景に、この街の「聖地化」を求める動きが〈平和都市〉のさらなる建造を掻き立てる。純化された〈平和都市〉をもとめ、一面では「政治」ではなく「静かな祈り」が課され、もう一面では「聖地」としての新たな都市開発が進展する。「原爆スラム」クリアランスはその最たる事例である。復興から生まれた基町相生通りは、〈平和都市〉復興の最終段階として「原爆スラム」へと変換され「除却」対象となる。焦土に芽生えた〈平和都市〉の理想は、ここに臨界点を迎える。

〈平和都市〉化のプロセスは、その起源を戦前にも求めることができる。第5章では1929年の昭和産業博覧会、1932年の時局博覧会、1935年の広島都市美運動の提唱を検討対象にこの点を明らかにすべく議論した。まず、1920年代後半から提唱された「大広島」構想の内実を明らかにし、その背景に「都市—農村の格差是正=構造的なアーバニゼーションの希求」および「都市人口の停滞=性質としてのアーバニゼーションの希求」を見出すことで、都市に対する「遅れ」への執着を指摘した。「大広島」建設にむけて実施された昭和博の展示内容は、最新の近代テクノロジーや都市的な産業技術の提示をいま・ここへ投影していこうとする特質(「内なる開発思考」と、この帝国主義的スペクタクルの創出(「外への開発志向」)を色濃く映し出すものであり、のちの広島の都市史を通底する「準備中の都市のスペクタクル」の原型を発露する。

1932年の時局博は「準備中の都市のスペクタクル」を踏襲するなかで、「軍事都市(軍都)」や「時局」といった都市イデオロギーを獲得する契機となる。アーバニゼーションへの希求を近代テクノロジーや産業技術にのせ表現した昭和博に対し、時局博は欠如していた「軍事都市(軍都)」などの都市表象のもとに、昭和博をより集中的かつ過剰に再演した。他方で、1935年の広島都市美運動の発足にまつわる一連の出来事は、「大広島」以降のアーバニゼーションの連続性を傍証するものとなる。石川栄耀の

来訪・講演は広島市行政中枢に影響をあたえ、旧来からのアーバンゼーションの希求に、「都市美」の側面を加える。また、「東洋のヴェニス」という表現をもって、石川のディスクールは戦後の〈平和都市〉化の根拠にまで延命する。さらに石川は「広漠たる空地」という表現を用い、原爆を経た広島島の焦土を新たなる都市の「建設予定地」としてみなすことを提案する。こうした「論拠」は、のちに濱井信三に引き継がれ、第4章で議論した〈平和都市〉復興への道筋を準備するものとなる。

以上の議論が、〈平和都市〉復興の実現に至る「空間の表象」「表象の空間」の転譯法的視点からの分析とすれば、第6章における、1895年に建立された日清戦争凱旋碑=平和塔、1947年に建立された平和塔と平和の鐘の系譜、そして1952年以降の二つの平和塔計画の事例検討は、〈平和都市〉の中枢性をめぐる「空間的实践」を検討するものである。第一に、日清戦争凱旋碑=平和塔の布置を19世紀から辿り直すことから、〈平和都市〉や「軍事都市(軍都)」といった複数の都市表象・都市理念をまといながらも、「別世界」への「分岐」としての特質を孕んでいたことを明らかにした。この日清戦争凱旋碑=平和塔は、常に他の空間的布置から「逸脱」したものとしてあり続け、「軍事都市(軍都)」の記憶のみを宿すものでも、〈平和都市〉の一部も完全には構成しえないものとしての「空間的实践」を詳らかにした。

第二に、1947年に建設された平和塔と平和の鐘は、〈平和都市〉の「神聖性」に対する矛盾を突きつける〈平和塔〉である。この平和塔・平和の鐘は、最初期から「旧海軍の払い下げ品」「戦利品」といった文字通りの矛盾した顔をもつ一方で、「復興のシンボル」とされ、「都市美観」を損ねるものとして撤去される。だが平和の鐘は、形を変え、代を重ねることで延命する。1947年につくられ、半世紀以上「忘却」され、その後に再発見される二代目平和の鐘も、ここでの含意を傍証する。つまりこの平和塔・平和の鐘は、空間的記憶と空間的忘却を内包する〈平和塔〉の中枢性としての特質を物語る。

第三に、1950年代以降の平和塔=仏舎利塔をめぐる2つのプロジェクトは、場所の痕跡を問い返す布置を示す。この平和塔は様々なアクターの思惑のなかで構想され、いつのまにか分派し、片方は二葉山の山頂に建立され、片方は比治山に工事用の鉄塔と穴を掘ったまま建設工事が中止される。さらに、双方の山頂に砲台が設置されており、双方に「一度も発射されないまま」原爆体験に遭遇するという空間の歴史が、この場所を〈平和都市〉の「平和塔」であるとする姿勢に、トポロジカルな疑問を突きつける。以上の平和塔の分析を通して、中心的なる都市表象・都市理念を常に周縁から揺り動かす「空間的实践」としての〈平和塔〉の姿を描出した。

以上の議論から、結論では本論文全体を振り返るとともに方法論的意義・分析的意義について整理し、今後の課題および展望を提示した。